

西日本地区

新たな世界へのサポーター

語られるに値しない人生はない。気がつけば
盲導犬が傍らに。地平を切り開いて一歩進む。

盲導犬の力借り

林 東植 (いむ とんしく) さん (80) / 広島県 / 島
ランブル (LR♂) ←オルティ (LR♂)

80歳になる林さんにとって「自立」という言葉は格別な意味をもっている。それは、在日朝鮮人二世という出自とハンセン病という、自分ではどうすることも出来ない差別と偏見の中を生き抜いてきた人生のキーワードだろう。



▲広島市内でランブルと図書館へ向かう林さん

1937年(昭和12年)1月大阪で生まれた。父母は朝鮮から出稼ぎに来た再婚同士。貧乏のどん底の生活だった。45年8月6日の原爆。広島市北東の山間地の国民学校3年生だった。

46年、家でぼんやり体をさすっているとき左腕皮膚の異常に気づいた。つねってもかんでも痛くない、ローソクの火に触れさせても熱くない。ハンセン病の発症だった。当時は「療養所に強制収

“自分で歩いてこそ人間、貫く

容され、死んでも帰してもらえない病気」だった。腕の包帯を見つけて慟哭する母をみて二人で泣いた。病気を隠して工業高校まで進んだが、中退して工事現場などで働いていた57年、足も悪くなって医者に行き病気がばれて収容された。

ハーネス改良、定期訪問で見守る

2002年4月、林さんは社会復帰したが、盲導犬を持とうと思ったのはその4年前である。「人間には自立というものが自分の中にある。苦労しても自分の力で犬の力を借りながら目的地に到達する」と表現する。林さんにとって、生きることは自分で歩くことなのだ。日本盲導犬協会も大きな宿題を突きつけられた。

手足に障害を持つ人と犬が安全歩行するには？ 犬と交信する左手は下垂して握力も触覚もなくU字型ハーネスを落としてしまう。足も地面を踏んでいる感覚がなくふらついて犬を押しやってしまう。ハーネスは、共同研究をしている横浜市立大学病院で、林さんには引っ張られる感覚は残っているのが分かり、細めのT字型ハーネスと補装具を開発した。足の問題は、使われずに衰えてしまった筋肉を取りもどすため、ウォーキングマシンで鍛えた。オルティとの共同訓練では、多い日には1日に8キロ同じ道を何度も歩いて、歩数で距離を覚え地図を頭にたたき込んだ。オルティが引退したとき、責任者の多和田理事と訓練士が訪ね、一度は2代目の貸与を断ったが、林さんの「生きる」熱意に懸けてランブルを決めた。断った理由は本人で犬の世話が出来ないこと。ユーザーと盲導犬の信頼関係は最重要の必須条件だからだ。以後、多和田さんは月に1回広島を訪

れペアを見守ってきた。

林さんが社会復帰で目標にしたもう一つは、良い本を思う存分読むこと。青春時代に読んだのは高校の友達に勧められた武者小路実篤の『友情』1冊だけ、本を買う金も読む暇もなかった。ボランティアによる代読がある広島市立中央図書館通いを始めた。知らない言葉が出てくるとどんな字を書くのか手のひらや背中に指で描いてもらう。口述筆記による執筆活動も始め、週4日図書館の対面朗読室で代読2時間、口述2時間の4時間通しになる。

図書館へ一緒に通ってくれたランブルが、今年3月、数度の胃捻転を起こして引退を余儀なくされ、今はヘルパーさんの肩を借りて歩いて通っている。2013年に出版した自分史の少年時代『ローソクの炎』に続く青年時代を、17年中に出版の予定だ。(取材)



▲口述筆記する林さんとボランティアさん

回っている地球に寝ころんで泣いた

1957年(昭和32年)6月、私は国立ハンセン病療養所長島愛生園に収容された。2か月後、1.5と1.2の視力があつた眼球に注射を打たれ失明した。20歳だった。1996年(平成8年)4月1日、「らい予防法」が突然廃止され、2年後の1998年7月、元患者13名が熊本地裁に国家賠償請求訴訟を起こし、2001年5月勝訴の判決。小泉総理が控訴を断念して確定した。全盲で全身障害者になった私は約半世紀の療養所生活に終止符を打って社会復帰をした。広島中央図書館でボランティアによる代読があることを知り、私は妻の肩を借りて通い始めた。

ボランティアの一人に広島ハーネスの会の理事をしている方がいて、盲導犬の使用を勧めて下さった。「ハンセン病で手首の下垂したこの手ではハーネスは握れないでしょう」。私の言葉に、「時代が変わっています。ハンセン病に対する偏見も差別も薄らいでいます。問い合わせてあげましょう」と指の曲がった手を握ってくれた。それがきっかけとなり、日本盲導犬協会横浜訓練センターで盲導犬との訓練が始まった。握力のない手からハーネスを何度も落とし、犬を押しやったり引っ張りす

ぎたりして訓練士に注意されながら何度も訓練を繰り返した。

2003年(平成15年)、ハンセン病退所者として全国で初めて、私に盲導犬オルティが正式に貸与された。5月27日、私とオルティの訓練の様子がNHKで放映された。オルティと歩くことにも慣れると、私はハーネスを握り、妻と買い物やカラオケに行った。何度か行くうちにオルティも店を覚えた。40年も一緒に暮らしていた妻が、突然家を出た。困った私は区役所に電話してヘルパーを派遣してもらえることになり、一人暮らしが始まった。オルティとの歩行も次第に慣れ、ヘルパーにハーネスを付けてもらっては一人で出かけるようになった。

ある日、カラオケ店のママに「今から歌いに行きたいんじやが、電車通りまで迎えに出てもらえんかね」と電話をした。電車通りに面した大型スーパーの前で待っていたママは「早かったんじやね」と、いきなり私と腕を組んだ。がなりたてるように歌っていたカラオケが突然途切れ、「イムさん」とママは私を韓国名で呼び、「『盃』を歌ってよ」とマイクを握らせ



込み上げてきた。「ありがとう。お前のおかげで一人でカラオケに行って酒を飲んで、一人で小便が出来た」。回っている地球に寝転んだまま、私はオルティを抱きしめ見えない目で夜空を仰ぎ声を上げて泣いた。

◀図書館の対面朗読室でオルティと



盲ろう者の^{いかり}錨に、^{てんびん}浮き輪に、天秤に

門川紳一郎さん (52) / 大阪府 / ^神

ベイス (^{LR} ♂)

2016年3月9日、門川さんは日本盲導犬協会としては初めての全盲ろう（目が見えない、耳が聞こえない）の盲導犬ユーザーになった。生まれつき原因不明の弱視のうえ、4歳の時はしかの高熱で聴力を失った。

小学部から高等部卒業までの12年間は盲学校。先生との1対1での授業が中心で、教材を工夫して熱心に教えてくれる先生に支えられた。大学卒業後、ミスタードーナツの障害者リーダー海外派遣事業の研修生としてニューヨークのヘレン・ケラー・ナショナルセンターに留学、その後ニューヨーク大学・大学院で修士号をとった。このころはまだ少しの視力が残っており、白杖の正しい使い方やアメリカ手話もここで習った。

帰国して障害福祉の道に入り1999年、大阪に視聴覚二重障害者福祉センター「すまいる」を開設した。盲ろう者が港で休める錨に、困ったときの浮き輪に、健常者とバランスよく生きる天秤にという目的を実現する場だ。その頃から視野が狭まり視力も落ちて、白杖での単独歩行が困難になった。街の変転も激しく道路やビルなど頭に覚えていた大阪の地図図では歩けない。「すまいる」の理事長のほか、内閣障害者政策委員会の委員や国立リハビリテーションセンター講師など、国や大阪府の公的な役職も多忙になった。「以前のように一人で自由に動きたい」——強い思いが盲導犬の申し込みとなった。

門川さんの担当になったのは田中真司盲導犬歩行訓練士。犬の訓練だけでなくそれを使う「人間」についての知識や洞察力も要求される一つ格上の資格を持つ。そして人と犬とのマッチング。門川さんの歩行の特徴は、体の左右の揺れが大きく、白杖歩行のペースも速く、車への反応もよい。そこで、ある程度体も大きくて揺れに耐えられ、ペースも保てるベイスは適任だ。声による指示（声符）より手の動きによる指示（指符）を優先するようベイスに教えた。ベイスの肩甲骨を触って手を地面に向けるしぐさだけでもダウンする声なし指示も訓練した。

盲導犬選びには、犬の^{ひん}稟性（＝生まれながらの性質）

も重要な要素だ。吠えたりいたずらをしても門川さんが気がつかない可能性があるので、家の中で吠えて要求するような性格でないこと、いたずらなど好奇心が強すぎない、という条件もベイスはクリアした。

訓練には通訳がついて、訓練士の言葉を指点字で門川さんに伝えるが、犬との歩行リズムを習得する訓練だから通訳で途切れさせてはまずい。門川さんとの間で、言葉は1文字で簡略化する、背中を触って合図するなど取り決めた。電子機器「遠隔振動子」も工業高専や民間の研究所と共同開発した。門川さんの両腕に振動子を巻きつけ、離れた後ろから信号を送って、ハーネスを伝わって来る犬の動きがどういうサインなのか、左右どちらに曲がるか止まるのか、ベイスとの歩行の良否など、訓練士の意図を伝える補助手段として活用した。

＊

ベイスと出会って、門川さんは「白杖1本で歩けなくなった頃に比べると、生き返った気がする」と言う。昨年冬には毎週のように遠出し、島根や沖縄、東京への新幹線往復もこなした。今ではベイスとコミュニケーションも十分。なにしろ、大阪弁で「行こか!」とやればゴー、「おすわり」でシットの仲なのだ。「見たことのないものを観たい。見たことのないところへも行ってみたい」門川さん、日本国内はもちろん、狂犬病の問題があるから少しハードルが高いが外国もだ。温泉につかって土地のおいしい初ものを食べるのも楽しみ。障害のある人は残っ

ている感覚を研ぎすましてものを観るから、味わい方も深いのだろう。話している相手が「心の美人」かどうかも……。

これから盲導犬を考えている人へのアドバイスは？「まず白杖歩行からやってほしい。自分も歩いてみて思ったけど、犬はどこへ行けばよいか分からないからユーザーが自分自身で歩けないと犬とも歩けない。白杖訓練もふくめた自立訓練が大事だ」とのこと。今のところ、正式に正しい白杖の使い方を学べるころは見当たらない。障害福祉の課題といえる。

「すまいる」では、パソコンなど盲ろう者に特化したIT講習会も開いている。17年3月には全盲ろう者のためのグループホームも開設した。（取材）



▲協会初めての全盲ろう者への共同訓練で、ベイスと歩行

「^{わがはい}吾輩は盲導犬である」

高橋信行さん (56) / 愛媛県 / ^島

フォリイ (^{GR} ♂)

焼き鳥屋の前まで来て、おいらは立ち止まって、兄貴に合図する。「兄貴い、焼き鳥屋ですぜ、今日は寄ってくんですかあ」。すると兄貴は、「グーッど。でも、今日は寄らずに帰るよ。ストレート・ゴー」と言う。おいらは「ヘイヘイ」と体の向きを元の方向に戻して歩き始める。

おいらは盲導犬だ。名前をフォリイ（Fory）という。おいらを育ててくれたパピーウォーカーさんが、「For you（あなたのために）」のスペルをつなげてForyと名付けてくれた。ゴールデン・レトリバーのオスで年齢は7歳だよ。兄貴の目はほとんど見えなくて、耳もあまりよく聞こえない。兄貴のような目と耳の両方が不自由な人を「盲ろう者」という。盲ろう者は全国で約1万4千人いるんだ。

おいらが兄貴と一緒にいる以前、兄貴は一人で歩いていた。外出する時、兄貴はすごく苦労していたんだって。白杖で地面をたぐりながら必死に歩いていたんだ。ある日、いつものよう



▲フォリイとのチャレンジのはじまり。（この続きは「Web小説『吾輩は盲導犬である』」<http://www.db-tarzan.info/fory/>をご覧ください）

に白杖を使って歩いていたら、気がつくといつの間にか交差点の真ん中にいたらしい。歩道をはみ出しちゃって歩いているのに気がつかなかったんだね。何台もの自動車が兄貴の前や後を猛スピードで走り抜けていく。「バカヤロー」、ドライバーたちの罵声が飛び交う。「やべえな、これ」。兄貴は、こんなことでは命がいくつあっても足りないと考え、日本盲導犬協会を訪れた。「俺を助けてもらえませんか」。そんな兄貴の前に、訓練士さんは、おいらを連れてきた。

「こいつは、フォリイといいます。目だけじゃなくて耳も不自由なあなたのような人のために、特別な訓練を施してあります。自動車のエンジンの音に敏感に反応する。だから停車していてもエンジンがかかっている自動車には警戒します」

「ドライバーからよく目立つように大きくて明るい色の犬です。目だけじゃなくて耳も不自由なあなたの安全な歩行に役立つはずです」「ありがたい。俺、がんばります。フォリイ、初めまして、よろしく」「初めまして、おいらこそよろしく、兄貴い」。こうして兄貴とおいらは出会ったのさ。なあ、兄貴！

7頭と40年間の歩み、盲導犬への社会のまなざしも変わって

大津かほるさん (70) / 長崎県 / ^神

ヴィーノ (^{LR} ♂) ←ウェル (^{LR} ♀) ←ハート (^{LR} ♀) ←ダンディー (^{LR} ♂) ←マリー (^{LR} ♀) ←フービー (^{LR} ♀) ←アリス (^{AT} ♀)

アリスと出会ったのは今から40年前、1977年の秋でした。初めて二人だけで外出できた時のあのうれしかった気持ちは今でも忘れられません。人の手を借りずに出かけるということがこんなにも自分を豊かにしてくれるものかと、心から実感した瞬間でした。合わせて7頭の盲導犬と出会いました。彼らは40年という大津家の歴史の中で、いつも中心にいて私たち家族を見守ってくれていたような気がします。

3年前に夫が亡くなって私は何をやる気にもなれなくなってしまい、盲導犬を持つ自信さえなくしていました。ちょうどそんなところに多和田さんと山田訓練士さんが来てくださり、7頭目

の盲導犬を持つ決心をすることができました。亡くなった夫が、お二人を私のところへ連れてきてくれたのだと信じています。

タクシーの乗車拒否やホテル、レストランの入店拒否が当たり前だった40年前に比べ、今は大変住みやすくなってきました。悩まされる時もまだまだありますが、これは引き続きユーザー全員が努力していかなくてはなりません。盲導犬と歩くことで見知らぬ人からもよく声をかけてもらいますし、何と言っても盲導犬を見た皆さんが笑顔になるのが一番うれしいことです。



▲ヴィーノと二人、潮風を受けて

優等生シータの後輩ヴォイスとのこれから

岩谷久美子さん (66) / 島根県 / 

ヴォイス () ♂ ← シータ () ♀

2008年の晩秋から白くてかわいい目をした盲導犬と訓練を始めました。名前はシータ、1年10か月で、訓練士は吉澤聡さんでした。初めての訓練なのでまごつく事ばかりで、それでもシータはどこに行ってもかわいがられました。訓練が終わろうとした日、テレビ局や新聞記者の人が来られ、シータと歩道橋を歩くことになりました。初めての歩道橋でしたが、シータは上手にでき、降りた所で吉澤さんが先に待っていて「シータ。グッドだったよな」と頭をなでてくれました。このルートが訓練なしのぶつつけ本番だったと知った記者さんは、「なんと！盲導犬は、俺たちよりも頭が良いのかもしれないね」と言っていました。

シータは、2008年12月11日から私のもとにやってきました。私はうれしくてうれしくて朝早くからシータと歩きました。周囲からは「岩谷さん。目が治ったの」と聞かれ、「いいえ。目は治っていませんですよ」と答えましたら、「杖もなしで歩き方も変わりましたね」と言われました。

めの結婚式で一緒に沖縄へ出かけたこともあります。滑走路で飛行機が揺れてシータは少し怖がりしましたが、「怖くないからね」と言いながら体をなでてあげたら落ち着きました。到着後に、「あら、盲導犬が乗ってたのは気付かなかった。とてもおとなしいのね」と皆さんが口々に感心しながらタラップを降りて行ったのを思い出します。



◀ヴォイスとの出発式歩行

妻の霊が盲導犬を通して私を見守っている

山崎武吉さん (88) / 島根県 / 

エディー () ♂ ← サーガ () ♂

私にとって3頭目の盲導犬となるサーガは、利口すぎるほど利口で、私の心を読み取る透視者のようです。朝起きようと思っただけで、足元に「ダウン」しているサーガが急に立ち上がります。私がシャンプーしようと思うと、何も言わないのに2階にバスタオルを取りに上がり、浴室で私を待っています。

しかし、歩道や横断歩道などに異常や予期せぬ障害があるときは、サーガは通行不可能を読み取り、私が「ゴー」といくら言っても動きません。先般、国道9号線を渡ろうとして信号機の音が二つ目になって1歩出ようとしたら、サーガは、すばやく私の身体の真ん前をさえぎり、暴走した信号無視の車から私を危機一髪、救ったのでした。横断歩道の向こう側で見ていた

シータのきょうだいに会いたくて神奈川訓練センターにも出かけ、碓谷さんとスフレちゃん、森さんとシェリーちゃんなどと楽しい時間を過ごしました。私と夫の同窓会が栃木県で行われ、皆さんに盲導犬の話をしたりもしました。シータのおかげで、私は行きたい所に行けるようになりました。どこに行っても「おとなしいのね。いつも綺麗にしているんですね」と言われたシータは、1年早く引退して、今は新しい家族と暮らしています。

2016年2月から、黒ラブの男の子ヴォイスがやってきました。体がやや小さくて毛がキラキラした、とても奇麗な盲導犬です。「ヴォイス」と呼ぶと喜んでハイハイしてきます。訓練中の私の頭にはシータがいて、どれだけ吉澤さんに注意をされたか分かりませんが、やがてヴォイスもかわいくなってきて「とてもかわいい」と言われると私もうれしくなったものです。普段、「さあ、外に出るよ」と言うとヴォイスは飛んできてハーネスに首を入れます。でもいったん外に出ますとヴォイスの顔はとても真面目です。いろんなカーブがあるのですが、その事もきちんと教えてくれます。一番驚いたのはワンツーしたくになると、その度に自分の顔を私の手の上に乗せ、教えてくれることです。

これからまだまだ遠くにも行く予定です。ヴォイス、あと7年間お母さんのことをどうぞよろしくね。「ダイヤモンドみたいだね」と言われている毛も、大切にしていきたいと思います。

女性が言いました。「ああ怖かった。もう1歩早く出ていれば大変なことになったわ」。

実はサーガと共同訓練を開始する予定だった前日に妻が永眠。1週間遅らせて訓練をスタートしたという因縁があります。家内の霊がこの盲導犬を通して私を見守っているがごときの出来事でした。そのサーガも今年春には引退し、続いてエディーが来てくれました。日に3回、5キロ以上は歩いており、これが私の健康の源になっています。いつか一緒に沖縄に出かけ、大好きな島唄を聴いてみたいです。



▲引退前のサーガと

キララと初心者ユーザーの私の「徒然日誌」^{つれづれ}

石田尚志さん (70) / 島根県 / 

キララ () ♀

《知りたがり屋のキララ》2015年7月に我が家に来たころは落ち着きがなく、何にでも興味を持っていた。車道の向こう側を散歩する飼い犬に見とれたり、田んぼのかなたを見て立ち止まったり。長ナスが畑で揺れていても面白くて仕方ないようで、何にでも反応するキララだった。

《キララ歩きで知り合いが》「おはようございます」と先を制するようにこちらから声かけを繰り返す。そんな触れ合いが続くうちに、「何てえ名前?」「何歳になあかね?」と出雲弁で尋ねられ、知り合いが増えていく。

《道端の草刈り》郊外の脇道は、歩道と車道の境目にも草が茂っていたりする。その草を「歩道の左の端っこだ」とキララ

盲導犬と歩いて、人の縁を広げていきたい

伊藤誠英さん (53) / 広島県 / 

ハーディー () ♂ ← ダックス () ♂ ← マーディ () ♂

私の最初のパートナーはマーディ。青森県で育った黒のラブラドルです。目のたれた愛嬌のある顔で、私によくなじんでくれました。共同訓練が無事終了し、いよいよこれからは二人で歩けるようになるという時は、子供の頃のように心踊り、うれしかったです。初日は、不安と喜びでドキドキしたのを覚えています。一緒に歩くと、目が見えてた頃の自分に少し戻れたように思いました。

いろいろな行事にも参加するようになりました。目が見えていた頃の私は、募金活動や学校訪問などにはまったく縁のない人間でしたが、おかげでいろんな人に出会い、知らなかった世界を知ることができました。マーディとの生活は4年間しかあ

パートナーがくれた四つの宝

今岡秀子さん (66) / 島根県 / 

ディーオ () ♂ ← ジュリア () ♀

網膜色素変性症と診断された1989年、盲導犬貸与で自立生活を望んだ私。2005年に1頭目ジュリアと出会ったが、10歳で引退して今は2頭目ディーオとユニットを組む。パートナーが私に与えてくれたものは限らないが、要約すると4点だろうか。

①「ごめんなさい」なしの毎日に喜び！ 人混みでの歩行は人とよくぶつかり「ごめんなさい」を連発していた。盲導犬によって、ぶつかることなく安全に歩行できる喜びを体感。スピードアップも大きな喜びだ。

②パートナーは家族の一員！ 目と動作で気持ちを伝える盲導犬は、心が通じ合う家族の一員だ。皆から愛されたジュリアの引退式には、子や孫たち13名が駆けつけて「神奈川訓練セ

も私も勘違いすると、いつの間にか車道の端を歩いてしまうのだ。そこで、刈り払い機を担いで車道脇の草刈りに出た。こんな時にはキララはお留守番。近所の人も道掃除をひそかにして



くれているようだ。歩道がきれいになっているのだ。

《進化する日々》低い縁石でのカーブ通過やシットして青信号を待つなど、ずいぶん動きがスムーズになった。お互い、「毎日が訓練と学習」と心得られる仲になった。新しい世界に進んでいこう、キララちゃん。

◀キララ歩きで、毎日が二人の勉強

りませんでした。私や家族に与えた影響は大きく、癒やしと団結力を与えてくれました。マーディという名前には、救世主という意味があるそうです。まさにその通り、私と家族の救世主となりました。

2頭目のダックス、そして現在は3頭目のハーディーに人の縁をつないでもらってます。今から目が見えるようになることはありませんが、これからもずっと、盲導犬たちと歩いていき、今以上に人の縁を広げていきたいです。

◀2頭目のダックスと歩行訓練中

ンターで前代末聞の引退式」と言われたほどだった。

③出会いを運ぶキューピット！ 小中高校や公民館などから講演依頼を受けて各所へ出かけた。多くの方々と出会い、力強いエネルギーをもらった。



▲2016年夏、ディーオと稚内公園内の「南極観測樺太犬訓練記念碑」前で

④感謝する心を学ぶ！ 盲導犬が多くの寄付や募金、ボランティアに支えられ誕生すると知り、感謝している。ならば、私のすべきことは、日々全力投球し輝いて生きること。盲導犬ライフを満喫し、どんどん外に飛び出して前進していきたい。

4頭の盲導犬、パピーさんとの交流を大事に

三輪利春さん(65)/島根県/

アラン(♂) ←ノア(♂) ←イチロー(♂) ←サチ(♀)

1988年9月、私は突然の交通事故により失明しました。長年勤めた会社は、有給休暇が切れると退職届けの提出を余儀なくされ、その時が人生で一番つらかったです。二人の子供は小学校1年生と幼稚園の年長組。今後の生活のことを考え、悩みました。多数の困難に体内時計も狂ってしまい、夜と昼が逆転する生活になり、家に閉じこもりがちになりました。

その苦しんでいた時に、盲導犬とパソコンに出会ったことが人生を変えてくれました。1991年3月に初めての盲導犬サチ、「さっちゃん」との共同訓練を受けました。その頃、訓練所は神奈川県茅ヶ崎市にありました。古い農家を借りた訓練所で、カヤぶきにさらにブリキを覆った屋根でした。部屋に入りベッドに寝転ぶと、天井板がなく、むき出しの柱や梁が見えました。猫が梁の上を歩いて、そのほこりが落ちてくるような建物でしたが、かえて新鮮で温かな趣がありました。訓練士さんが交代制で食事を作ってくれるなど家庭的な雰囲気もありました。さっちゃんと一緒に生活をしていた頃、正月に何げなくラジオを聞いていたら、『『さち』と言う、盲導犬と歩く幸』という俳句が流れてきました。詠んだのは親しい友達で、私の気持ちを表していました。その俳句はよく思い出します。

サチとのお別れの時はすごく悩みました。盲導犬との生活は出会いがあり、別れがあり、そして新たな出会いを続けていく。私たち盲導犬ユーザーの宿命だと思います。また、パピーウォーカーさんとの交流もさっちゃんと出会



▲アランの向こうにパピ▲ウォーカーさんがいると思うといとおしさも増して

った時から始まり、その後も盲導犬が代わるたびにそれぞれのパピーさんと続けています。2頭目と3頭目の訓練は新しくできた横浜の訓練センターでした。2頭目は「イチローくん」、3頭目は「ノアくん」です。さっちゃんが亡くなった時にはイチローくんと葬儀に参列し、そのイチローくんが亡くなると、2011年6月11日、彼のパピーさんとノアくんと一緒に富士ハーネスの盲導犬のお墓に納骨に行きました。2006年10月1日、富士ハーネスが開所されたとき、内覧会にノアくんと参加しました。その前日にはノアくんのパピーウォーカーさんと東京・お台場で待ち合わせし、観光しました。

現在は4頭目の「アランくん」と生活していますが、彼はとても賢い子で、歩くのが大好きです。尻尾をブンブン振り回して歩くので、こちらも楽しくなってきます。昨年10月、東北に出かけた際、アランくんのパピーウォーカーさんと羽田で待ち合わせして喜び合いました。盲導犬との生活は、外に一人で出て行くことの楽しさ、四季を体で感じ風を切って歩く喜びなどを教えてくれました。また、盲導犬を通じてたくさんの友達ができました。さらに、1頭目の盲導犬の訓練の時に、盲導犬は生まれてから亡くなるまでたくさんのボランティアの方の深い愛情を受けて育てられていることを知りました。それらは私の社会参加と自立につながってゆきました。1991年にパソコンを習い始めたことがきっかけでパソコンボランティア活動を立ち上げ、有志による会社設立にもつながりました。町を歩く時も笑顔で「グッド」。現在60代半ばとなりましたが、生きがいを持って盲導犬との生活を楽しんでいます。

た。いつもと違うポンポンでした。

お母さんが言っていました。盲導犬と人は一頭と一人に見えるけど、ユーザーにとっては一頭と一人で「私」なんだと。そうだね、だって、私はお母さんの「目」だもんね。



▲リオにも招待状が届いた、おいの結婚式で。前列左が大石さん(2016年)

一頭と一人で「私」です

大石清美さん(56)/島根県/

リオ(♀)

私がお母さんと生活するようになって、3年になります。私たちは松江と鹿児島を年に何回も往復します。長時間の移動で大変だけど、訓練士さんに教えてもらった通り、ちゃんとダウンしてますよ。ある時、知らない人に「この子、動かないけど調子悪いんじゃない？ 生きてるよね？」って言われたお母さんは、盲導犬のことをいろいろ話していました。私は「生きてます、今仕事なんです」と声を大にして言いたかったです。

悲しいこともあったの。飲食店に入ろうとして、お母さんが「盲導犬と一緒にです。よろしくお願いします」と言ったら、「犬はダメダメ、ごめんね」と言われちゃった。お母さん、すごく悲しそうな顔をしていた。お母さんは、私の頭をポンポンし▲

「タンデム」のユーザー～オーレはどちらが握っても賢く

中柴健一さん(49) 知子さん(38)/広島県/

オーレ(♂)

私たち夫婦はタンデムでオーレと歩いています。ハーネスを握るのは平日が私、日曜日が夫。夫が手にする時は、私が夫につかまって歩くといった感じです。オーレはどちらがハーネスを握っても、うまく対応する賢さを持ち合わせています。

そのオーレが我が家に来たのは2008年12月。今年で10歳になりました。実は私たちは島根の訓練センターの1期生です。盲学校に通っていた頃、教員二人が盲導犬と通勤する姿を見ていたので、盲導犬のことは多少なりとも知っているつもりでしたし、互いに幼少時に犬を飼っていたので、盲導犬に対しても自信満々でした。しかし、これは見事にオーレに打ち砕かれました。私は単純に犬がこちらの言うことを理解して行動してくれるものだと思っていました。初めてオーレにハーネスを装着しようとした時のことです。オーレは後ずさりするのです。「あれっ、仕事をするのが嫌いなかな」と心配したら、訓練士さんが「ちょっとプレッシャーに弱い子なんです」と教えてくれました。「そうか、責任感のある真面目な子なんだ」。私はオーレの前でゆっくりしゃがみ、そろそろと首にハーネスを通しました。ハーネスをつけたら頼もしい盲導犬オーレのできあがりです。「ストレートゴー」「ヒール」「ストップ」「ウエイト」、これらのコマンドにちゃんと反応してくれました。

しかし、盲導犬は決してロボットなどではなく、しっかり心



▲旅先で雪の壁を背景にオーレと記念撮影

を持った子たち。枯れ葉がカサコソと動いていたら鼻先をそちらへ向けてクンクンし、ボールが跳ねていたら大喜び。でも、試行錯誤をしながら1年たった頃、夫も私もオーレのことがだんだん分かってきて、オーレも私たちを理解してきたようでした。散歩コースも何通りか覚えてしっかり歩き、すれ違いに犬を見ても気を奪われることはありません。近所のスーパー、郵便局、コンビニ、薬局、職場までのルートはオーレに任せて安心して歩きます。町内の人たちも私たちを温かく見守ってくれています。オーレと歩く姿は、すっかり街の風景に溶け込みました。毎週日曜日は広島市へ出かけますが、駅周辺や駅ビル、デパートでもしっかり誘導してくれるし、障害者センターのトレーニングルームで私たちが運動をしている間は寝て待っていてくれます。

年に2回、オーレと旅行します。平泉の中尊寺金色堂や横須賀の軍艦三笠、鹿児島島の桜島、熊本城、鳥取砂丘、沖縄、和歌山の熊野古道、長崎のグラバー邸、大阪城……。新幹線、飛行機、バス、タクシーにホテル。JRや空港の職員さんたちも協

力してくれます。旅先ではオーレがいるととても楽しく、現地のガイドさんたちも盲導犬ユーザーを観光ガイドする機会はなかなかないので「とても勉強になる」と言ってくれます。

オーレと9年近く過ごしてきましたが、一緒に暮らせるのもあと半年くらい。警察犬、麻薬探知犬、牧羊犬、猟犬、聴導犬、災害救助犬、盲導犬。大切な仕事を任されて人間と協力し合う犬たちを見ると本当に感動してしまいます。オーレとの残された日々を大切に紡いでいきたいと思います。

暮らしの中から、「ここを歩きたい」を見つけない

田部博也さん(58)/島根県/

シャイン(♀)

シャインは初めての盲導犬であり、初めて一緒に暮らす犬です。今までになかった習慣に慣れるのは大変。これまでの生活ではあまり時間を気にすることがなかったけれど、シャインが来てから「次はいつトイレをさせる？」「そろそろご飯あげないと」と、気がつけばいつもシャインの事を思っているようです。

今はまだシャインと歩き始めたばかりなので、日々の暮らしの中から「ここを歩きたい」を見つけていきたい。でも、頭の中



で地図を描き、自分の位置を道路のアップダウンや目印から見つけないと、どこにいるか分からなくなってしまうから、もう少し慣れないといけない。田舎なので歩いている人も少なく、周りの人への援助依頼もできないですし。

シャインの性格は素直でかわいい犬。でも、散歩中に少し道草が多いかな、と感じることもある。家族もとてもかわいがっていて、特に妻はもともと犬が大好きなので、すぐにシャインのことも気に入った様子。私が仕事をしている間は、シャインは傍らでおとなしく待機してくれているので安心です。

◀気がつけば、いつもシャインのことを思っています

盲導犬1頭の背後に計り知れない努力の汗が

野地土栄さん(82)/島根県/

ケビン(♂)

これからもずっと忘れないでしょう、今年5月6日、ケビンを手放した日のことを。島根あさひ訓練センターから迎えの車が来て、ケビンが乗り込んでドアが閉まりました。娘が言うには、ケビンはずっと私を見つめていたということです。別離の時は泣くまいと決めていたので、前日にボロボロと大泣きしていると、ケビンがやってきて私の顔の涙をなめてくれました。別れてからは寂しくて、寂しくて、心に大きな空洞ができました。散歩に行こうと思っても、もうケビンちゃんはいません。

順番待ちだった養護老人ホームから「当たった」という知らせが来て、聞くとところによると盲導犬同伴は無理らしいし、何よりも入院中の夫の具合が思わしくなく、断腸の思いで手放す決断をせざるを得ませんでした。

ほぼ17年間の盲導犬との生活。2頭目のケビンは2009年春に我が家に来ました。夫の健康が優れず、私が落ち込んでいるとそれを察してか、ケビンは布団の上に来て慰めてくれました。そういう時は昼もピタッと体を寄せてきて、折れそうになる私の心を支えてくれました。よく散歩したからでしょうか、狭心症の発作も起きなくなり、周囲からは「歩くのが速いのね」と感心されるほどでした。ケビンのおかげで安全に歩かせてもらっているし、本当に「いの



ちのパートナー」です。

社会に引っ張り出してくれたのもケビンです。小中高等学校へ招かれて子供たちに話し、県職員の前でしゃべり、県校長・教頭会議で講演し、県老人講座で語りました。1時間でも2時間でも、私が話している間は傍らにダウンしているケビンですが、講演が終わって会場から拍手をいただくとスクッと立ち上がります。そのしぐさがほほ笑ましいのか、会場はさらにドツと湧きます。もともと外へ出るのが嫌いで、そんな所へ立つのは柄でもない私でしたが、それによって人とのつながりが広がり、職業のイメージと異なる意外な一面を知ったりし、確実に私の世界は広がりました。

子供たちの前で話す時は、盲導犬は私たち目の不自由な者たちを安全に歩かせてくれるが、「盲導犬だけが偉いんじゃないだよ」と力を込めました。1頭の盲導犬が私のもとへ来るまでには、子犬を1歳まで育ててくれるバピーウォーカーさん、それを訓練してくれる人たち、犬舎を掃除する人たち、犬の育成に寄付してくれる人たち……。背景には網の目のようにつながった一人ひとりの貢献があるのです。そこを考えて欲しいと丁寧に訴えます。食べ物でも洋服でも、社会はそのようにして成り立っているんですと。盲導犬という例を持ち出すことで具体的に伝えられたと思っています。

それにしてもケビンちゃんは今、どうしているかな。

◀ケビンとはよく歩いた

駅ホームに乱入した迷い犬に、ティファニーは微動もせず

加藤今日子さん(44)/島根県/

ティファニー(♀)←マッチ(♂)

小さくて、少しびびり屋さん、でも賢い。そんなティファニーの話をします。

私たちは田舎道を歩くだけでなく、通勤のためにバスや電車もよく利用します。ある日、地元駅のホームで電車を待っていたら、すぐ近くで「キャー」という悲鳴が聞こえました。どうやら、どこかの飼い犬が迷い込んできたようでした。

実はもともとの私は犬が苦手。1頭目のマッチとの暮らしで慣れたのですが、いまだに補助犬以外の犬は少し苦手です。その時も思わず固まってしまいました。そんな私の横でティファニーは迷い犬に目もくれずダウン。私の指示通りに動き、迷い犬が近づいても無視していました。オロオロしていたのは私の



盲導犬はさすがです。電車でどんなことが起こってもティファニーの鳴き声を聞いたことはないですし、「チェア、ゴー」と指示すると、座席に誘導し私を見守ってくれています。

これからいろいろな出来事があると思いますが、ティファニーと一緒に歩んでいきたいです。

◀電車では、ほら、この通り

キーパーと散歩途中に吹雪、幼少時の「野生」感覚よみがえる

原田一二三さん(70)/山口県/

キーパー(♂)

私が住む所は中国山脈の麓、周囲を山に囲まれた田舎町です。

標高360メートルの高原。スキー場もあり、リンゴの産地としても西日本では結構、名が知られています。そんな所ですから私とキーパーとの散歩コースで特別に危険な場所はありません。15分、20分、30分、40分とコースはいろいろありますが、普段は鼻歌まじりで気楽に歩いています。

それはある初冬の出来事でした。山地特有の北風が吹き、寒くて今にも雪が降りそうな日です。私は「まあ大丈夫だろう」と高をくくって、よりによって40分コースをキーパーと歩きだしました。ところが、途中で急にふぶいてきたのです。向かい風が強くて、体を前傾にしても足を踏み出すのがたいへんな状況が続きました。

その中でふと、とても懐かしいというか、心が浮き立つというか、自然に



◀通っているキリスト教会の入り口でキーパーと

電車の扉に挟まれた～丁寧な対応を願いたい

比奈幸三さん(67)/広島県/

ブレイン(♂)

私は「総領の基六」こと、比奈幸三です。そして、私のエスコートと相談役をしてくれるブレイン7歳。「頭脳」という意味ですが、若くない私を助けたり、時には自分のわがままを通したり、利口なやつです。彼との暮らしは4年目になります。犬と暮らすのは4頭目ですが、ペット犬とは全く違うとしさがあります。伴侶とも違うが、ある面、伴侶以上のいとしさがあるように思うのは私だけでしょうか。

2016年の夏、私たち二人は電車の扉に挟まれました。福山から内陸の三次^{ちよし}につながるローカル線での出来事です。午後4時過ぎに福山駅を出て、約30分の旅をして近田という駅に帰ります。この時間帯の電車はワンマンカーで、ドアの開閉は乗客が自分で操作します。その日も、近田駅に着くので、降りる支度でパートナーをアップさせて待っていました。間もなく、電車が止まったので「ドアゴー」「ストップ」で、「開くボタン」を押してドアが開いたので、



「ゴー」と掛け声をかけるや否やパートナーは飛び出しました。しかし、私は閉まるドアに腕を挟まれて車内に残されました。その一瞬の出来事は正確に思い出せませんが、大声で「ドアを開けろ」と叫んだように記憶しています。そうこうしているうち、運転手が来て「けがはないですか」と聞くので、血が出ていないので、「おそろくないと思う」と答えました。「もし痛みとかがあったら、駅に電話してください」と、忙しそうに運転席に戻っていき、電車は何もなかったように走り出しました。

それをホームで見送っている時、今あった事がよみがえり、最後の「もし痛みがあったら電話ください」と軽く言われた事と、「けがはないけれども、人身事故だなあ」という感情が湧き出して無性に腹が立って来ました。ダイヤは守りたい気持ちは分かりますが、もう少し丁寧な対応ができないもののでしょうか。この後に東京メトロで盲導犬ユーザーがホームから転落死する痛ましい事故が起きました。「扉事故」はブレインと二人の内緒ごととして、社会を見る時の教訓となっています。

◀北海道・大倉山ジャンプ競技場を見たあとで

全国のユーザーをつなぐ～全力疾走でパラ国体 V2も

清水和行さん（56）/広島県 / 他協会

ルーラ（ ♀・他協会）←ヤード（ ♂）←クーリー（ ♂）

清水さんの所属するグランドソフトボールチーム広島 Miracle Bonds（ミラクルボンズ）は2016年秋の全国障害者スポーツ大会（パラ国体）で2連覇を果たした。55歳の清水さんは全盲の左翼手として活躍した。学生時代から40年以上続いているグランドソフトだが、単なる楽しみではなく、視覚障害者のレクリエーション・スポーツの普及という大きな視野が清水さんにはある。

先天性の弱視だったが、小学2年の体育の授業中、ドッジボールが顔に当たって左目が網膜剥離で失明、右目も視力が落ちた。そのため、広島県立盲学校に転校し、高等部理療科で鍼灸あんまを学んだ後、筑波大学の理療科教員養成施設で教員免許を取得して、母校の盲学校で教鞭をとった。27歳の通勤中、わずかに見えていた右目が電柱の金属棒にぶつかって緊急入院。両目とも完全に視力を失って退院した。

「ところが、これこそけがの功名とでもいうべきか」——と言うところが清水さんらしいが、退院後すぐに広島県第1号の盲導犬を手にするようになった。盲導犬の歩行訓練を終えて広島へ帰ったその日、出迎えてくれた支援者たちに清水さんは「散歩がしたいです」と話している。白杖歩行では一歩ごとに足元の安全を確認しながら歩かなければならないが、盲導犬歩行では足元の安全を犬に任せて、流れるように早く安全に歩くことができる。電信柱の脇をするりと通り抜けたとき、電信柱の存在を耳で感じる事ができた。風が耳を走り抜けていくとき、耳で景色を見ているような気がして、「散歩」そのものを楽しむことができる。散歩こそ社会参加の第一歩であり、『散歩を楽しみたいから盲導犬』と言える文化をつくった功労者である。

1994年、広島ハーネスの会を代表して、当時の日本盲導犬協会の同窓会長だった池ヶ谷勝美さんらと、全犬使会（全日本盲導犬使用者の会）を立ち上げ初代会長を務めた。全国に点在していたユーザーをつないで国や公共交通機関にはたらきかけ、2002年、身体障害者補助犬法が議員立法で成立した。04年には筑波技術大学に内地留学し、この時、清水さんにとって3頭目となる盲導犬クーリーと続く4頭目ヤードを日本盲導犬協会から貸与されている。協会の訓練士学校の非常勤講師も務めており、「10年間は全力疾走だった」と述懐する。

52歳で、勤めていた盲学校を早期退職し、治療院『あんま天国はり治国』を開設し、国王ならぬ院長。「これを笑ってくれる患者さんしか来ませんよ」と苦笑する。「目指すのはタモリや所ジョージ。嫌なこともギャグで受け止めて……」と言う清水さんだが、昨今テレビで人気のゐぶらりさんぽ、はとっくに先取りだ。公務員のときより

も経済的には減収したが、精神的にも時間的にも充実している。いろんな世代の人とも会えて、スポーツも出来る。盲導犬のおかげで周りの人とすぐ仲良くなれる。血圧が高いといわれるが、犬と歩く職場までの30～40分が第一の健康法だ。昨年のカーブ優勝では、街に出てファンと大騒ぎした。もちろんルーラもカーブ女子の赤い服を着て。

27歳から29年間のユーザー歴がある清水さんは「歩くだけなら人の介助を受ける方が楽かもしれない、盲導犬はそれなりに手がかかるから。しかし、自由気ままに、好きな時に好きなところへ、自分本来の歩きが出来るのは盲導犬のおかげ」と言う。奥様の美保さんも6頭目の盲導犬レジーナ（関西盲導犬協会）を持っている。維持費もスペースも2頭分になるが、それぞれの生活パターンに合わせて、結婚当初から続いている。

＊

グランド（＝壮大な・雄大な）ソフトは見ているだけでも面白い。「ルールが確立していて公平で安全だから。全盲者が全力疾走できる球技はソフトとサッカーだけ」と清水さんは言う。プレイヤーは10人（全盲者4人以上、他は弱視）。試合球はハンドボール大で何の細工もない。全盲の打者は、全盲の投手がゴロで投げたボールと地面とがこすれる音だけが頼り。野手も、打球音やバウンドしてくるボールの音で判断する。だから主審の「プレイ」がかかったら両軍ベンチも観客も声を出してはいけない。衝突を避けるため守備用と走塁用ベースを別々に置くなど、ルールは複雑になるし、審判も難しくなる。広島チームが毎年秋、パラ国体前に「おりづる杯大会」を主催して各県に呼びかけ開くのも、選手の強化とともに、審判スキルの維持と要員の確保が大きな目的だ。

サポーターの女性が「パラリンピックの種目になればいいのに」とつぶやいていた。（取材）



▲ヤードと一緒に「全力疾走だった」
◀広島チームが主催したグランドソフト大会での清水さんとルーラ

エブリーとともに夫婦で歩ける幸せ

道畑秀夫さん（63）道畑百代さん（55）/島根県 / 

エブリー（ ♀）

タンデムで歩くよろこび、社会に恩返しを

自宅周辺で盲導犬の体験歩行をした時、一人で歩くのはこんなに楽しく気持ちがいいものかと感じ、妻と二人でのタンデムの共同訓練をすることにしました。最初はもたついていましたが、少しずつ歩けるようになり、4週間余りで合格、我が家にエブリー号が貸与されました。

それからはエブリーとの散歩が日課。最初は歩調も合わず、前から車が来ると怖くて足が止まっていたましたが、エブリーを信頼して歩くことで、だんだんエブリーとの歩調も合い、風を切って速く歩けるようになりました。

私の住む町は島根県のほぼ中央にあり、山と海と川に囲まれた風光明媚な町です。毎日エブリーと草花の香りを嗅ぎ、木の葉の音や竹林のざわめき、鳥の声、動物の声を聞きながら歩く



▲川のせせらぎを聞き、風を感じて、エブリーと歩くのは楽しい
▶新しいレインコートを着たエブリーと道畑夫妻



よろこび、歩けるよろこびを体いっぱいに感じています。

このよろこびも、パピーウォーカーさんや協会職員の方、ボランティアの方々のおかげです。学校訪問、募金活動、いろいろな行事に参加して、みなさまに恩返ししたいと思います。これからもパートナーのエブリーと妻百代と歩くよろこび、歩けるよろこびを体いっぱいを感じながら歩き、この江津の町で暮らしていきたいと思っています。（道畑秀夫さん）

大丈夫、お母さんはエブリーが一番だよ

娘が、婚約者と二人で挨拶に来た日のことです。私たち夫婦と4人でテーブルを囲み、改めて挨拶をしようとしたその時、私たちの間にいたエブリーが前足を左右に開いて、私と夫の膝に乗せたのです。これまでに見せたことのないしぐさでした。エブリーが何を言いたかったのかはわかりませんが、姉の伴侶になる人と初めて対面する妹の心境だったのかもしれません。

そして挙式当日、私は準備のため他の家族より一足早く、エブリーと松江に向かいました。列車の旅の間、娘の小さい頃のあれ

これを思い出しながら足元に座っているエブリーの頭をなで続けました。エブリーもこの日のために用意したバラの花模様のコートに着替え、式に参列しました。披露宴のクライマックス、新婦からの手紙と花束の贈呈の時、お仕事中に声を出すことのないエブリーが「クーンクーン」と鳴きました。

その娘夫婦にも女の子が生まれ、数か月に1度、親子で顔を見せに来ます。孫にみんなの視線が集まっていると焼けるようで、4歳頃から全くなくなっていた「ヘソ天」を突然してみせました。赤ちゃん返りしたお姉ちゃんみたいな風情です。

そんな時エブリーの耳にささやきます。「大丈夫、お母さんはエブリーが一番だよ」。（道畑百代さん）